

令和 5 年 10 月 25 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00026

研究課題名(和文)動物の生殖発生をめぐる論争史を通してみた西洋古代の人間観の思想文化史的解明

研究課題名(英文)Philosophical Approach to the View of Humanity in Classical Antiquity through an Analysis of the Debate about the Generation of Animals

研究代表者

今井 正浩 (IMAI, MASAHIRO)

弘前大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：80281913

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、人間を含む動物の生殖発生をめぐる論争史を通してみた西洋古代の人間観の特質を示すものとして、つぎの二点を明らかにした。

1) アリストテレスの発生理論は「精液は運動の始原を提供するものとして、雄のみに帰属する」という前提に立っている。これは「精液は両性の全身からやってくる」という考え方に立って説明を試みたヒポクラテス医学派の医師たちの説に対する批判的応答と解することができる。2) ガレノスの発生理論は、プラトンの魂の三分説に立った人体理解と「精液」を両性に帰属させたヒポクラテス医学派の医師たちの説に依拠する一方で、アリストテレスの発生理論に対しては、根本的修正をせまるものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、人間を含む動物の生殖発生をめぐる論争史を概観することによって、古代ギリシア・ローマの医学者たちが西洋古典古代の人間観の展開にどのような貢献をなしたかを明らかにしている。本研究を進めるにあたっては、西洋医学史研究や古代哲学研究といった専門領域の枠にとらわれず「西洋古代の思想文化史」という幅広いパースペクティブに立って、これまでの専門領域を横断するという手法をとっている。それによって、従来の単視眼的な手法では解明され得なかった西洋古代の人間観の複雑さや多面性を理解するための新たな視座を提供するとともに、新しい学術的地平を開拓しているという点において、その学術的価値や社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)： This research has elucidated two aspects as features which may characterize the development of the view of humanity in Classical Antiquity focused on the debate about the generation of animals, including humans.

1) Aristotle's doctrine of the generation of animals, based on his hylomorphic theory that only a male provides semen as the source of movement, would be regarded as a critical response to Hippocratic doctors who developed their view of reproduction and generation of humans on the basis that semen comes from every part of the whole body of both parents.

2) Galen's doctrine of the reproduction and generation of humans, which has as its theoretical grounds (1) Platonic theory of tripartite theory of soul and (2) Hippocratic view of semen attributed to both parents, goes directly against (3) Aristotle's doctrine of the generation of animals, which may be incompatible with Galenic conception of semen.

研究分野：西洋古典学 西洋古典古代の科学思想史(おもに医学思想史)

キーワード：動物の生殖発生をめぐる論争史 西洋古代の人間観 古代ギリシア・ローマの医学者たち ヒポクラテス プラトン アリストテレス 初期アレクサンドリアの医学者たち ガレノス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究者は、経験科学としての医学を誕生させた古典期ギリシアの精神風土を、思想文化史的観点から明らかにするという研究に長年にわたって取り組んできた。この間、ギリシアの医学者たちの人間理解の方式を同時代の哲学者たちの人間観と比較しつつ、その基本的特質を明らかにしていくことによって、ヨーロッパの歴史文化の源流の一つにあたる西洋古典古代の精神風土が形成され、それが多面的に展開していく過程において、医学者たちがなした独自の思想的貢献の足跡を検証することに、おもに力を入れてきた。

(2) こうした学術的関心に沿った研究者自身のこれまでの研究の展開において、人間を含む動物の生殖発生をめぐる論争史に目を向けることが、新たな研究課題として意識され始めた。人間を含む動物の生殖発生メカニズムやその原因などをめぐる西洋古代の論争の歴史を辿ることは、生物学・発生学の歴史に特化した研究に大きく寄与するだけではない。それは、医学者たちの人間理解を同時代の哲学者たちの人間観と比較しながら、その特質を解明するという手法にもとづく研究者の研究の進展にとって、新たな角度から考察の手がかりを与えるのではないかと考えたわけである。

2. 研究の目的

(1) 本研究は「動物の生殖発生をめぐる論争史を通して見た西洋古代の人間観の思想文化史的解明」という研究課題名に端的に示されているように、人間を含む動物の生殖発生メカニズムやその原因などをめぐる論争の歴史を丹念に辿ることによって、そこから明らかになってくる西洋古代の人間観の特質を、古典ギリシア語・ラテン語の原典資料等にもとづいて実証的に解明していくことを目的としたものである。

(2) 本研究では、紀元前5世紀にヒポクラテス(c.460-375 BC)によって経験科学として確立されたギリシア医学が、この論争の初期の段階からその展開と帰趨にきわめて大きな影響を与えたという事実に着目する。ヒポクラテスやガレノス(129-c.210 AD)に代表される古代ギリシア・ローマの医学者たちが、人間を含む動物の生殖発生をめぐる論争に参画することを通して、ギリシア古典期からヘレニズム期を経由して、ローマ期にいたる西洋古代の人間観の展開にどのように貢献したかという点を思想文化史的観点に立って明らかにしていくことが、本研究の主眼ということになる。

3. 研究の方法

(1) 令和元年度(2019年度)には、人間を含む動物の生殖発生をめぐる論争の初期の段階において、ヒポクラテス医学派の医師たちが、この論争の焦点となる基本的な課題、すなわち、(ア)「精液」(スベルマ)および「月経血」(カタメーニア)の本質をめぐる問題、(イ)男女(雄雌)の性別決定の問題、(ウ)親子間や同族間の類似性をめぐる問題などの究明にどのように関わってきたのかという点に注目しつつ、考察を進めた。

(2) 令和二年度(2020年度)には、アリストテレス(384-322 BC)の動物学関係の一連の論考のうちで、おもに『動物の発生について』と題する論考を、最も主要な資料的典拠の一つとして取り上げ、動物の生殖発生メカニズムやその原因などをめぐる、アリストテレス以前の哲学者たちや医学者たちの諸説に対して、アリストテレスがどのような観点に立って批判的検討を加えているかに焦点をあてるとともに、アリストテレス自身の動物の発生理論の基本的な特徴と問題点を明らかにしていった。

(3) 令和三年度(2021年度)には、以上の論争が、ヘレニズム期以降の医学者たちや同時代の哲学者たちによる議論をへて、ローマ期の医学者たちや同時代の哲学者たちに、どのようにして受けつがれていったかを見究めることに軸足を移すとともに、最終的に、この論争がどのような決着をみることになるのかという点に焦点をあてた。

この作業を進めるにあたって、研究者は、ガレノスの『精液について』(全二巻)と『胚子の形成について』と題する論考を手がかりとして、この医学者の発生理論とその特質を明らかにするための作業に重点を置いた。けれども、この作業を進めていく過程において、ガレノスの諸論考の中で、別のテーマについて主題的に論じながら、発生の問題にも論及している、そのほかの諸論考(『子宮の解剖について』や『身体諸部分の用途について』第十四巻など)も考察の対象とする必要が生じた。

(4) 以上のような追加的な考察の結果として、本研究は、計画自体を当初の予定から一年間延長するという対応をとることによって、最終的に、令和四年度(2022年度)末をもって決着したというわけである。

4. 研究成果

本研究の研究成果としては、おもに、以下の二点にまとめることができる。

1) アリストテレスの発生理論とヒポクラテス医学派の医師たちによる人間の生殖発生に関する説について

アリストテレスの発生理論は「精液は運動の始原を提供するものとして、雄のみに帰属する」という前提に立っている。アリストテレスの発生理論は「精液は両性の全身からやってくる」という考え方に立って、人間の生殖発生メカニズムやその原因などについて原理的な説明を試みたヒポクラテス医学派の医師たちの説に対する批判的応答と解することができるのではない。

アリストテレスは、かれ自身の哲学の根幹をなす「素材形相論」(hylomorphism)にもとづいて、先述の課題(ア)～(ウ)に対して、きわめて明確な説明を与えている。アリストテレスは、男性(雄)が「精液」の放出を通して人間の「形相」(エイダス)を提供するのに対して、女性(雌)は生まれてくる子供の体の「素材」にあたる「月経血」を提供すると主張している。アリストテレスによる説明は「精液は男女両性の全身からやってくる」という考え方(後世の「パンゲネシス(汎生説)」の祖型にあたるもの)に立って、課題(ア)～(ウ)に対して原理的な説明を試みたヒポクラテス医学派の医師たちの説を明確に念頭に置きつつ、かれらの説を手厳しく批判することを通して、「素材形相論」を前提とした自らの発生理論の正しさ、ないし妥当性を主張することを目的としていると解することができる。

2) アリストテレスの動物の発生理論に対するガレノスによる人間の生殖発生をめぐる理論について

医学者ガレノスによる人間の生殖発生をめぐる理論は、(1)プラトンの「魂の三部分説」に立った人体理解と(2)「精液」を男女両性に帰属させたヒポクラテス医学派の医師たちの説に依拠する一方で、(3)アリストテレスの発生理論に対しては、これに根本的な修正をせまるものとして解することができる。

ガレノスは、ヒポクラテスの医学文書中の『生殖について』・『子供の自然本性について』・『疾病について』第四巻から構成されている一連の論考、アリストテレスの動物学論考(『動物の発生について』など)の論述内容を丹念に分析するとともに、初期アレクサンドリアの医学者たち—ヘロピロス(c.330-250 BC)やエラシストラトス(c.320-240 BC)など—によって提供された解剖学的知見に自分自身の経験や知見などを加えながら、人間の生殖発生をめぐる先人たちの諸見解に対して批判的な議論を展開するなどして、きわめて独創的な説を展開している。

ガレノスの発生理論の主な特徴としては、(1)人体の構造および働きについては、プラトンの「魂の三部分説」に基づく人体理解を前提としていること、(2)人間の生殖発生の仕組みをめぐっては「精液」を男女両性に帰属させたヒポクラテス医学派の医師たちの考え方に基本的に依拠していること、その一方で、(3)「素材形相論」を前提としたアリストテレスやかれの支持者たちの発生理論に対しては、これらに抜本的な修正を迫るという考え方に立っているという点を指摘することができる。

以上のように考えた場合、ガレノスによる人間の生殖発生をめぐる理論は、人間を含む動物の生殖発生をめぐる論争史の延長線上にあって、この論争の過程で提示されてきた医学者たちや哲学者たちの諸説を統合しつつ、この論争の歴史に対して、最終的な決着をつけることを目標としたものであると解することができる。

以上のことを、本研究課題にもとづく研究成果として提示する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 今井正浩	4. 巻 第12号
2. 論文標題 ガレノス『胚子の形成について』－古典ギリシア語からの翻訳と注解－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 弘前大学人文社会科学部『人文社会科学論叢』	6. 最初と最後の頁 23-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro IMAI（今井正浩）	4. 巻 第9号
2. 論文標題 Redefining the Position for Praxagoras of Cos in the History of Ancient Greek Medicine and Philosophy	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Studies in the Humanities and Social Sciences（弘前大学人文社会科学部『人文社会科学論叢』）	6. 最初と最後の頁 23-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro IMAI（今井正浩）	4. 巻 第10号
2. 論文標題 Aristotle and Ancient Greek Physicians in the Debate about the Generation of a Human Being	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Studies in the Humanities and Social Sciences（弘前大学人文社会科学部『人文社会科学論叢』）	6. 最初と最後の頁 57-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今井正浩	4. 巻 第13号
2. 論文標題 ガレノス『胚子の形成について』－古典ギリシア語からの翻訳と注解－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 弘前大学人文社会科学部『人文社会科学論叢』	6. 最初と最後の頁 77-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 今井正浩
2. 発表標題 医学者ガレノスの発生理論における基本問題
3. 学会等名 日本科学史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 今井正浩
2. 発表標題 アリストテレスと古代ギリシアの医学者たちーヒトの生殖発生をめぐる論争史の一局面 -
3. 学会等名 日本科学史学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 今井正浩
2. 発表標題 アリストテレスと動物の生殖発生をめぐる諸問題
3. 学会等名 日本科学史学会第66回年会（岐阜大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今井正浩
2. 発表標題 医学者ガレノスとヒトの生殖発生をめぐる論争史の系譜
3. 学会等名 日本科学史学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 今井正浩 [分担執筆 (項目執筆者)]	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 726
3. 書名 日本科学史学会編『科学史事典』	

1. 著者名 今井正浩、濱岡剛 (共著、共訳)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 388
3. 書名 アリストテレス全集 1 1 動物の発生について	

1. 著者名 今井正浩 [分担執筆 (項目執筆者)]	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 807
3. 書名 日本医史学会編『医学史事典』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------